

＜つぶやき＞を運ぶ少女

— シスネロス『マンゴー通りの家』を読む —

斉藤 修三

＜要旨＞

「人はなぜ差別するの？」振り返ると、ここ数年わたしはこの問いばかりを追いかけてきたようだ。聖書に「あなたは寄留の^{きりゅう}外国人をしえなくてはならない。あなた方はエジプトの国で寄留の外国人であったので、寄留の外国人の心を知っているからだ」(出エジプト記)とあるが、問題はこの言葉に集約されると思う。自他を分ける壁を絶対視し、自己のなかに他者を、他者のなかに自己を見る想像力をなくしたとき、差別はしのびよる。元来人はみな「寄留の外国人/よそ者」だった。なぜなら一回限りの＜出来事^{いのち}＞である以上、反復可能なカテゴリーでしかない「何者か」という言葉が再現できない余剰、語りえずしたがって不可知の＜よそもの性＞こそが「固有のわたし」の正体だからだ。取り替えのきく「何者か」ではなく、唯一無二の「よそ者＝究極^{マイノリティ}の少数派」だからこそ＜個＞は壊れやすく希少なはずなのに、孤独を怖れるあまり自己の異質性を認められないわたしたちが「同じ何者か」という表象の虚妄にしがみつki、固定された主体や帰属意識^{アイデンティティ}でしか人を見れなくなったとき、人種民族・国籍・性別などをめぐり序列化された見えない国境線が実体化され、よそ者は被差別者となる。そのかき消された声をふたたびわたしたちに届け、内なるよそ者のつぶやきを呼び覚まし共振させる＜声の運び屋＞が、チカーナの詩人作家シスネロスの派遣する少女エスペランザである。

キーワード:アメリカ研究, アメリカ文学, 多文化主義, チカーナ/チカーノ文学, フェミニズム

Key word: American Studies, American Literature, Multiculturalism, Chicana/o Literature, Feminism

謝辞:ともにこの物語を楽しんでくれた学生たちへ

はじめに

外国文学に接するとき、ふたつの視点がある。作品が生み出された社会や時代背景など、その文化的特殊性への目配りがひとつ。もうひとつは特殊性を越えて、いつの時代のどんな読者にもアピールする普遍性に注目する姿勢である。だが問題がある。普遍性とは何か、誰から見てそうなのか——この点を見逃すと、一部の人にしか妥当しないものが普遍の名のもとに広められ、そうでないものは悪しき例外とされてしまう。この言葉にひそむ政治性^{ポリティクス}に、わたしたちは無自覚ではいられない。

ならば普遍性など度外視して、特殊性だけ見ればいいかと言うとそうでもない。他人事に終始すると、^{のぞ}覗き見的好奇心を満たすだけで終わる。差別や人権にかかわる内容が多いマイノリティ文学だと、なおさら始末が悪い。「恵まれた」環境にいる自分の安泰を確認するために、対岸の火事として作品が消費される。文学の変革力が矮小化される。

そこでわたしは特殊性に留意しつつ普遍に向かう地ならしとして、特殊性と共振するものが身のまわりにないか、学生に考えてもらうことにしている。双方がまったく同じでは共振はおこらない。かといって隔たりすぎてはいけない。同じ生活者として響き合う経験や日常感覚がないだろうか。その気になると、作品の出来事や人物に類推的に照応する事例が意外と見つかるものだ。双方を想像力でリンクさせる習慣が身につくと、マイノリティ文学は身近になり等身大で向き合えるようになる。「あの人たち」のことが「わたしたち」のことになり、加害者・被害者を問わず差別や暴力の当事者がわたしたちのとなり、そして内部にさえもいることに気づく。

他者のなかに自己をさぐり、自己のなかに他者を見る。こうした意識をもってある物語を授業で読んできた。エスペランザというチカーナ(メキシコ系アメリカ人女性)の少女が、引越し先のシカゴのスラム街で成長する過程を描いた掌編小説集『マンゴー通りの家』である。人々との交流を通じて彼女が自分自身と出会うまでの軌跡を、思春期のナイーブな一人称の語りがつづった44のエピソード集。あるときはユーモラスに、あるときは怒りをこめて、またあるときは詩的抒情性をたたえながら、出会いと別れ、友情と性のめざめ、結婚や離婚や多様な家族のかたちを極貧の暮らしを背景に物語る。1984年の初版以来アメリカ中の読者に愛され続け、現在世界十カ国語に翻訳。作者のシスネロス(Sandra Cisneros, b.1954)はこの成功によって、アメリカ少数派文学のホープと目されている。

貧困街のメキシコ系の話、同じ十代が主人公とはいえ、学生にはあまりにも特殊だろう。褐色の子どもたちが洗濯物と生ゴミとネズミをよけながら裏通りを駆けぬける。どうみても清潔でモノがあふれる日本とはちがう。おまけに主人公はコンプレックスのかたまりでカッコいいとはいえない。人好きのする妹ネニーとちがいが、やせて血色も悪く髪は猫っ毛、何よりも貧しさが劣等感をかきたてる。前に住んでいたアパートを通りがかった学校の尼さんに「あなた、あんなところに住んでるの?」と言われてからというもの、閑静な郊外の庭付き一戸建てが彼女の夢の家。けれど引越し先はひなびた集合住宅。ますますふさぎこむ彼女は最初の章でこう願う、「一刻も早くここから抜け出して本当の居場所をみつきたい」。案の定学生の反応は、「自分の恵まれた暮らしを親に感謝したい」とか「同じ人間だから差別はよくない」といった、おどなりで優等生的な感想が多かった。

しかし物語と自分との接点をさぐりながら読み進むにつれて、主人公の悩みがあながち他人事でないことに学生たちも気づく。そして「本当のわたし」や「自分らしくいられる場所」を追い求めるといふ、いわゆる〈自分さがし〉がテーマなのを知ると、学生の目はがぜん輝き出す。じっさい、自分という存在のわからなさや寄り辺なさを抱えるのはなにもマイノリティに限らない。見かけはいいモノを着て明るくふるまってはいても、「これが本当のわたし?」とい

う不安をいだく学生は多い。自分に自信がもてず、「自分が嫌い」、「自分を変えたい」という否定的な自己認識に苦しむ子も少なくない。マイノリティ文学に多い＜自分さがし＞のテーマは、「わたし」をめぐる十代の日本人女性の悩みと意外に結びつくのである。

もちろん主人公にあまり同一化すると、今度は背景の特殊性が見えなくなる。しかしこちらの盲点は、教師がアメリカの民族問題を解説すればある程度はカバーできる。じつはこのような読み方を作者自身も奨励している。

わたし自身が主人公のモデルかどうか、それはイエスでありノーでもあります。ただひとつだけ確かなことは、みなさんがそれぞれにエスペランザだということです。…自分を恥じる気持ちを克服するまでの道のりなのです。家出したことのある人、不良に加わったことのある人、バイトをクビになった人、希望を見失ったり、怒りがこみあげたり、そんなときみなさんはエスペランザなのです。自分が誰かってことを忘れてはいけません。

朗読テープの前口上で、シスネロス自身こう言うのだ。国籍・年齢・男女を問わず、自分のパーソナルな経験と共振させて読むのを作者も望んでいる。

利点はまだある。ともすると大上段から論じられがちな多文化主義vs旧来の同化主義の議論を、当事者の日常の目線から見なおせる。「人種のるつぼ」という名のもとに長くアメリカを支配してきた同化主義が、有色の貧しい人々の目に実際はどのように映るのか。一方「サラダボウル」は現実の生活感覚をどの程度反映するのか。生活者の目線は、社会を俯瞰する学者にはとらえきれないものを見せてくれる。

作品の特殊性に留意しつつ、読み手は自分の生活感情と響き合うものをさがす。主人公はきみの周囲や内部にもいる。自分さがしの旅に学生が行き暮れたとき、彼女はどんな道案内をしてくれるのか。大文字の普遍主義のかわりに、細部に宿る「小さな普遍」をさぐるなかで見えてくるものを、多文化社会アメリカのゆくえとして希望を込めて差し出せればと思う。

1. カテゴリー化を迫る他者の声（その1）

マンゴー通りでの新しい生活。だが主人公を待ちうけるのは、「アメリカの夢」から見放され自分と同じように風采のあがらない人々だった。ひなびたコンビニとりサイクルショップ、古い建物からのぞく細長い空と栄養失調気味な榆の街路樹が四本。浅黒い肌のチンピラや浮浪者がたむろする。とりわけ女たちが自信なさそうなのを見て、なぜ自分たちはこうも自分らしくないのか、なぜ本当の自分から疎外されるのか、その経緯を知るために主人公は一人ずつ物語り始める。住人は主人公が自分の状況を客観的に知るための「鏡」の役を果たしている。

自分らしさを奪うものの正体、それはこの街をおおう「声」である。人々には聞き取れないし、文章に書かれてもいない。波長の低い通奏音のように、気づかれず音色を変えながらこの声は人々を動かす。たとえば「自分はこうあらねばならない。さもないと誰からも認められな

い」という声。当人はそれを自分の声とするがじつは違う。暗黙のうちに絶えず呼びかけられると、いつしか自分の声と区別できなくなる。内面化された他者の声、イデオロギーである。

主人公もこの声に囚^{とら}われていた。郊外の家をほしがるのは、そうしないと「白いアメリカ」の一員らしくないと考えたからだ。物質的繁栄をきわめた1950年代以降、人々の自己意識が「市民」から「消費者」に変わり、モノ買いが存在証明の手軽な手段となるにつれて、移民やマイノリティのいづく「アメリカの夢」も消費の欲望へと変質し、持ち物によって人を判断するただのスノビズムに墮落する。「この家を買え。さもないとおまえは人並みのアメリカ人ではない。」テレビドラマで見る白人中流の暮らしを通じて、主人公もこの声を内面化していた。言うまでもないが、「一億総スノッ化」したわたしたちに彼女の愚かさを笑う資格はない。

「モノ買い＝アメリカ人」という声を内面化する一方で、貧困者はその不可能性に日々さらされる。価値観を共有せよと言われながら、その実践からは排除される。観念と現実のあいだに越えがたい溝を掘りながら、なおかつ飛び越えよと命じるダブルバインドの声。るつば論に見られる同化主義は、同化と排除を同時に迫りながら貧困者の前に醜く立ちはだかる。

他者にレッテルを貼られることでしか承認されない事態は、深い依存心を生む。ものごとの価値をはかる尺度を、有色の貧困者は放棄せざるをえない。価値観だけを主流に同化させ豊かさを美德とすれば、貧しさは当然悪であり、さげすみやあわれみの対象は自分しかない。こうして自己蔑視や自己卑下にとらわれるとき、マイノリティは本当の弱者になる。低い自己評価こそ、強者による弱者抑圧のもっとも強力な武器なのだ。住人は「白い鏡」が映すゆがんだ虚像に自分を同一化し、アイデンティファイ 従属的な主体の位置に固定される。サブジェクション/サブジェクト 主流の同化主義イデオロギーは、語ること、表象の主導権を独占し、語られる側に劣等感や羞恥心や弱小感を刷り込むことによって「わたし自身でいる」権利を奪い、支配を正当化してきた。人並みの服を着れない恥ずかしさのあまり学校をやめたのは、主人公の母親だった。娘も家を恥じ、履き古した靴を恥じ、さらには英語で発音しづらい自分の名前さえも恥じるのだった。

2. カテゴリー化を迫る他者の声（その2）

「こうあらねば認められない」という声は主流の同化論だけにとどまらない。子どもたちは大人があげる同様の声にもさらされる。ジェンダーである。「男の子は男らしく、女の子は女らしく」という声は、家庭や学校や遊びの場で、さらに教会やマスメディアなどあらゆる機会を通じて子どもの耳にささやかれ、個人差もあるが大半の子が十代にさしかかる前に内面化する。

男の子と女の子はべつべつの世界に生きてる。男の子は男の子の世界に、わたしたちはわたしたちの世界に。たとえばうちの弟たち。家のなかなら、わたしやネニーになんだかんだといっぱい話をする。なのに、外で女の子と話してるのを見たことがない。（中略）

ネニーをあの手でバスタブのガキどもといっしょに遊ばせるわけにはいかない。じゃないとあの子たちみたいになっちゃう。ネニーがわたしの後についてくるようになってから、わたし

が面倒を見なければならない。(8)

自然だった異性との交流が急に「恥ずかしい」と意識されだす経験は、わたしたちにも覚えがある。異性から距離をおき、男女別々のグループを作り出す。そしてたがいに相手とちがう属性をグループ内で競って身につけながら、「男らしさ」や「女らしさ」のカテゴリーに同一化してゆく。過剰な場合「なりたくてもなれない」自分に対する否定的な感情を生み出しやすく、その子本来の傾向をつぶしかねない点は主流の同化主義の悪影響とよく似ている。

自明視されてきたジェンダー規範が男女の生物学的本質でなく、じつは環境次第で変わりえる後天的で恣意的な文化の約束事ではないことに、ようやくわたしたちも気づき始めた。引用の後半でもバルガスのワル「ガキども」が遊び相手なら、妹でさえ男っぽくなる。子どもを性別で分ける慣習は、千差万別の個性を矯正する格好のイデオロギー装置だったわけだ。ジェンダーは人々が内面の声として日々実践することでかろうじて維持される程度の脆弱な基盤しか持たない。だからこそしつけの名目で、とくに女子への刷り込みが昔から重視されてきた。

女たちをとらえる暗黙の声の存在に、物語ることで主人公も気づいてゆく。たとえば英語では「希望」を意味する *Esperanza* という自分の名が、元来スペイン語では「かなしみ」や「待つこと」を意味したのを知ると、由来を追って亡き曾祖母の言い伝えへとさかのぼる。

ひいおばあさんの名前だったのが、いまはわたしの名前になった。ひいおばあさんも、わたしとおなじで、中国の干支でいう午年生まれだった。ひのえうまの女は運が悪いということになっている。でもそんなのって中国人のつくった嘘だと思う。だって中国人はメキシコ人と同じように強い女を嫌うからだ。

わたしのひいおばあさん。彼女に会えていたらなって思う。まるで野生の馬みたいな女で、気性が荒くて、ぜったい嫁になんか行かないって言い張ったらしい。そこで、ひいおじいさんが頭から袋をすっぽりかぶせてさらってしまった。ほんとうだよ。まるで豪華なシャンドリアを盗むように、強引にやりとげたのだ。

それからというものの、ひいおばあさんは絶対に彼を許さなかったそうだ。そのあと一生、彼女は窓から外をながめて暮らしたんだ。たくさんの女たちが窓辺で頬杖ついて、悲しみをこらえて暮らしたように。(中略) エスペランサ。わたしはひいおばあさんの名前を受け継いだ。でも、彼女の窓辺の場所までは受け継ぎたくない。(10-11)

「強い女」が不幸なのは男に嫌われるからではない。「家内」の役割に甘んじ能力を発揮する場を外の世界に持てないからだ。曾祖母と背後の無数の女たちにとって、窓辺は「希望」ではなく自由を奪う牢獄の鉄格子であり、誰かが連れ出してくれるのを「待つ」「かなしみ」の場所ではない。それがいわば彼女たちのマンゴー通りだった。名前にそそがれた思いの深さにたじろぐ主人公は、ジェンダーの囚われから身を解き放ったところに自分の居場所があると考え出す。

だが現代のマンガー通りも過去に劣らずジェンダー化されきっている。「これが女のしあわせだ」とか「こうあらねば女として認められない」という声は、「女」というカテゴリーへの適応度で個の価値をはかる。他者によるカテゴリー化と承認、他者の語りに同化を迫る呼びかけがここでもまた個別の声を奪う。人妻ラファエラは美しいがゆえに夫から自由な外出を許されない。母子家庭で育ったミネルバは、家庭をかえりみない夫がたまに帰宅しては暴力を振るっても、同じ思いを自分の子にさせまいとして別れられない。夫に呼ばれてメキシコから来たママシータは懐かしい故国に帰りたいが、英語がこわくて外出できない。「家内」と英語を彼女に強制する夫は、いわば英語帝国主義とジェンダーというふたつの同化イデオロギーによって妻をこの街に縛りつける。女性が従属的に主体化する様子を主人公に語らせることで、チカーノにいまなお根深い性差別の構造を作者は浮き彫りにしてゆく。

アリシアは、そんな声の暴力にあらがう数少ない女性の一人として登場する。死んだ母親の代わりに父親と下の子たちを世話しながら、この街でただひとり大学へ通う。苦学して貧困から抜け出そうとするが、夜更けまで勉強しているとネズミに驚かされるのが何よりもこわい。

目をつぶればそんなもんはどっかへ行っちまうさ、とアリシアの父親はいう。おまえの空想だ。とにかく女というもんは、朝はトルティーヤのしたくのために星が見えるくらい早起きしなければならんのだから、もうとっくに寝てる時間なんだぞ、と。(31)

良妻賢母が女のつとめであり、娘に大学は不要だと父親は考える。高等教育が「適度」の花嫁修行でなく、女性が父親と夫に依存せずに生きるための数少ない選択肢であるのを、アリシアは身をもって主人公に教える。

一般的に思春期の女の子にとって、結婚や家庭は肯定否定を問わず現実の裏づけのない空論になりがちだ。その点この街は「ハッピーエンド」や「ゴールイン」など親が娘に見せたがる表向きの見解ではなく、その「後日談」の実情を見せる。気づかないうちに、主人公は生きた学習をこの街でしているわけだ。

女性に同化を迫るものがジェンダーに関連してもうひとつある。それは声というより男が女に向ける視線に宿る。思春期の主人公は、ふとしたことで男の視線が子ども相手だったこれまでとは大きく変わるのを知る。たとえばもらったハイヒールをはいて得意げにモンローウォークで歩いたときに、言い寄る浮浪者が向けた視線。あるいは学校帰りに自分を見つめるチンピラ青年の目つき。これらは慣れ親しんだ当人の自己認識をまっこうから打ち砕く。欲望を喚起する性的女のイメージを勝手に投影して個を破壊し、女性を男の性欲が眼差す客体／対象／モノに還元するレッテル貼りの暴力がここにはある。

ハイヒールは脱いでしまえばいい。チンピラも見返すことで彼女は抵抗を試みた。だが社会に蔓延する視線の暴力がセクハラやレイプの呼び水となるのを、彼女は身をもって知らされる。たとえば「赤い道化師」の章で、男たちに襲われたときに「すっぱい口」を押しつけながら加害者がささやいた“I love you, Spanish girl”という言葉だ。むろん彼女はスペイン人でなくス

ペイン語を使ったわけでもなく、見知らぬ男に「好きだ」と言われる筋合いもない。ただ褐色の肌というそれだけを指標に被害者の欲望が動き出し、当人のあずかり知らない勝手な意味をおしつけられる。男が投影したのはせいぜい「褐色の女＝情熱的」という映画やテレビドラマが作り上げたエキゾチックなステレオタイプだろう。安易なレッテルが固有名を押しつつ、男の欲望を満たすだけの名前のない人形に彼女を変えてしまう。民族的偏見と性差別の両方に満ちた“Spanish girl”という言葉は、表象行為のもつ暴力性を醜くさらけ出す。

一方的にカテゴリー化を迫る他者からの同化作用は、さまざまに姿を変えながら一貫してこの街を支配する。それは他者の語りに合わせる限りににおいて承認を与える、表象による支配と呼べるだろう。つづいて論がイデオロギーとして機能してきたのも、表象の持つこの暴力性に負うところが大きい。性差別と人種差別にそくしてそのメカニズムをまとめておこう。

日本でもそうだが、「男らしさ」を中心としたチカーノのジェンダー規範は、対となる「女らしさ」の下支えによって成り立つ。身だしなみや清潔さや礼儀が女の子に要求されるのも、そうやって一方の性を印づけ特殊化することで、もう片方の性が普遍化され匿名のまま権力を独占するのに役立つからだ。「男」が「普遍的人間」を代表できたのは、女性を“woman”として切り離し特殊化したからである。それはちょうど人種差別が、肌の色に特殊な意味づけをすることによって、無色透明のなかに白人を隠し普遍の声を与えたのに呼応する。表象の政治学において権力は無記名の語りを装い、語る権利を暗黙のうちに独占する。白人と男性はみずからを普遍化することでマイノリティと女性をつねに一方的に承認される側に固定し、カテゴリー化によって個の自由と独自性を奪う。このような表象による支配こそ、サイドの告発した「オリエンタリズム」だった。もはやこうなると、個々の人格に敬意を払う対等な関係は成り立たない。語られる側は自分に自信が持てず劣等感に苦しみながら、依存することでしか保身を取られないと思いこむ自発的な服従、貼られた劣位のレッテルに従うだけの主体化しか残されない。語る側は表象の裏側に身を隠し普遍の声として名指しと承認の権利を占有し、支配をますます強固にする。人種差別は肌の色に基づかないし、性差別も男女の本質に由来しない。どちらも差異そのものでなく、差異が認識され語り出されるなかで権力は動き出す。表象の暴力に満ちたこのような同化主義イデオロギーが、人種問題や貧富の差そして男女間などの領域で虚偽意識を植えつけ、自分らしくいられる場所を人々から奪い去る。それを主人公はこの街で目撃する。

3. 対抗的な自己カテゴリー化の声

さて、街の人々は同化の声をただ無批判に内面化するわけではない。対抗的に自己主張する。自分たちの語りを作り、そのなかで「何者か」になろうとする。第一の声が他者によるカテゴリー化ならば、第二の声は対抗的に弱者が打ち出す自己カテゴリー化と呼べるだろう。

男の子の場合、前にふれたバルガス家の「ガキども」は、母子家庭の子でくさんで親の目が届かないため相当なあばれん坊だ。よその家の屋根に登って度胸だめしを競うなど、命がいくつ

あっても足りないようなワルサばかりする。大人から見放されたこの子らにとって、度胸や腕力の強さこそが自分を周囲にアピールする数少ない機会なのだ。このことは主人公の弟にもあてはまる。自警団ごっこでけんかや武器の使い方を覚えながら、がまんや強さを身につける。自分たちが社会の恥とされ落伍者の予備軍あつかいされる事実と日々闘わなければ、男の子は劣等感や弱小感につぶされてしまう。自尊の感情を守るため強さにあこがれる気持ちは十分理解できる。犯罪やドラッグやアル中などスラム街の問題は、貧困だけが原因ではない。刷り込まれた自己否定の感情にズルズルと追い詰められるのに対するぎりぎりの抵抗。それが「男らしさ^{マチズモ}」という自己カテゴリー化の声である。

女たちも対抗的に声をあげる。マリンは主人公より年上、ダンスとラブソングとおしゃれが大好きな女の子。親戚を頼ってプエルトリコから移り住んだが、やはりこの街を出てもっとマシな家に住みたい。彼女にとって美しさは至上命令だ。視線を寄せる男のなかから金持ちを選び、財力によってここから連れ出してもらうためである。男を意のままにあやつる力としての美しさ。じつはそんな戦略も、長年男が文学やアートに描いてきた「運命の女 (femme fatale)」を流用したマスメディアのステレオタイプでしかない。否定されがちな自分の価値を、女は美しくなることで周囲に認めさせる。むろんマリンだけに限らない。とくにありのままの自分ではいられない場所を学校にも家庭にも持てない少女にとって、invisible な状態を脱して「自分を認めてほしい」という visibleness (可視化) への欲求は、切実な主体性回復の声である。おしゃれや流行を過剰に追いかけるのも同じ理由からだろう。マリンの夢を非現実的と笑うのは簡単だ。でも、そんな可能性の低い可視化のオプションしかないと思ひこむほどに、せっぱつまったところに少女を追いかけるものが何なのか、スラム街脱出という同じ闘いにいどむ主人公は、彼女を冷たく笑い飛ばしはしない。「戦友」のかたわらに立ち同じ目線で読者に問いかける。

思春期の少女たちを引きつけてやまない自己規定の声がもうひとつある。恋愛である。エキゾチックな黒髪の美少女がぎゃくにわざわざいし、サリーは不良化を怖れる父親の厳しい監視と、級友の嫉妬と好奇の目にいつもさらされる。強者や多数者側が押しつけるゆがんだレッテルを貼られ沈黙を強いられる構図は、他者の語りにむりやり自己を溶解させられる同化主義イデオロギーの典型だった。つねに見られ、噂され、決めつけられる彼女は、ひたすら「目を閉じる」ことによって他者の語り、表象の暴力をやりすごそうとする。傷ついた親友の身の置き所のなさに自分と同じ境遇を察知する主人公は、彼女の思いをこんな風に代弁する。

サリー、たまには家になんか帰りたくないって思うことはないの？自分の足がある日ひとりでに歩きつづけて、マンガー通りからずっと遠いところへ連れていってくれないかしら、なんて思うことはないの？(中略)(そこにいけば)あんたがいけないことをやらかすのを今かと待ち構えてる世間の人々もいない。そのときあんたが本当にのぞむこと、心底求めているのは、人を好きになることなんだよね、サリー。愛して、愛して、愛しぬくことなんだから。誰もそれをバカげたことだなんて言えないはずよ。(82-83)

父親の発するジェンダーの声と級友の悪口、これら他者によるカテゴリー化に囲まれて窒息しそうなサリーは、恋愛に解放の糸口を求める。愛のなかで能動的な主体性を取り戻し、愛されることで自尊の感情を守る。男社会の期待と意図に満ちた視線に日々さらされることで次第に制限される自己実現の夢を、思春期の少女はロマンティック・ラブに見出そうとする。

マリンは美しさによる承認を力とし、サリーは恋愛という相互承認の物語で自己規定を試みる。肌の色や貧困やジェンダーなどさまざまな同化主義イデオロギーが有色の女を幾重にも取り囲み、劣等感や弱小感を刷り込んでスラム街に閉じ込める。そのなかで二人の少女が対抗的にあげる自己カテゴリー化の声は、数少ない選択肢に命運を賭ける弱者のぎりぎりの抵抗にほかならない。結果的には二人とも脱出できないが、主人公はその成否から多くを学ぶ。美しさという「花」がじきに枯れるのも知らずひたむきに踊るマリンの姿がせつないのは、この劇的アイロニーが世界中のマリンやサリーたちへ作者の贈るかなしいエールだからかもしれない。

マリンは、街灯のあかりをスポットライトのようにあびて、ひとりで踊りながら、いつもの唄をいまもどこかで歌っている。わたしにはわかる。車が止まるのを、流れ星が幸運を運んでくれるのを、だれかが自分の人生を変えてくれるのを、いまも待ちつづけている(27)。

4. 一見対立し合う第一の声と第二の声は、相互補完・共犯関係にある

第一の声は中心から周縁に同化を迫り、第二の声は周縁から中心に差異の承認を要求する。ふたつの声は人々の主体化をめぐり拮抗する。たとえば主流の語りに同化された男たちは、刷り込まれた「何者か」という劣位の自己像をなんとしても受け入れがたいとき、「男らしさ」に積極的に同一化することで弱さを否認し別の「何者か」になろうとする。だが強さの装いは、地道な努力と忍耐によらずギャンブル性の高い夢を求めがちだ。当然ほとんどは負け組みとしてスラム街に取り残される。迫り来る劣等意識をふりはらうには、犯罪や暴力など強さの承認を強いる破壊的な行動しかなく、その矛先を向けられるのは家庭しかない。妻ミネルバを殴る夫、娘サリーに手を挙げる父親…。「何者か」に閉じ込めようとする他者の声と、すすんで「何者か」になろうとする自己の声、一見対立する両者がじつは相互補完的に男を権力や支配欲へ駆り立てて、さらなる弱者を生み出す。ふたつの声は共犯的にこの街をますますゲッター化する。

女性にとってもふたつの声は共犯的に働く。どちらも承認するのは主流であれ男であれ自分以外の誰かであり、つねに「認められるモノ」の位置に自分を置くため、依存心を助長する点是不変である。「認められたい」症候群とも言うべきこの性癖は、日本でも幼児期にありのままの自分を受容されなかった若者に多い。とくに女の子の場合、学校でも家庭でもしかるべき居場所がないまま思春期を迎えると、「可視化」の欲求が美しさや恋愛への過剰な願望としてあらわれる点は、すでに述べたとおりだ。能動的な愛をめざすサリーだったが、「よい子」でなければ

父親に認められなかったため、素顔の自分を肯定する自尊心を育めないままできている。大人びたエキゾチックな美しさのおかげで、満たされなかった愛を乞いつづける少女がいまなお心の奥に住みついている。そんな彼女だから、男にもてる程度の認知は砂漠に水を垂らすほどでしかない。「愛したい」は「愛されたい」に容易に反転し、恋愛願望は「触れる/触れられる」という性の相互承認へ簡単にエスカレートする。奪われた鍵を返してもらい代わりに、近所の空き地で要求通り一人ずつ男にキスをする彼女は、それが強制なのか同意なのか自分でもわからないはずだ。求められ強いられる受動性のなかにしか主体化の喜びを見出せない。そんなセクシュアリティにまつわる女性のステレオタイプをなぞることで、「愛」の名のもとに女が主体的に自己放棄するロマンティック・ラブのイデオロギーにからめとられてゆく。居場所を開くカギを父親から恋人の手のなかにゆだねることで脱出をもくろむ彼女は、早々と結婚し学校をやめ、願いかなって街を出た。しかし待ち受ける夫の家が、経済的依存と暴力への服従に満ちたもうひとつのマンゴー通りでしかないことに本人は気づかない。「恋人」や「妻」になることが、唯一他者の声と自己の声の接点だったサリーは、主人公と共有する自分さがしにこうして終止符を打つ。

男に認められることで「何者か」になる「わたし」は、「男に認められないと無価値のわたし」に反転する。サリー以外にもこのことを主人公に教える女性が多い。母親がむかし不登校になったのは、人並みの身なりで自己定義できない恥意識によることはすでにふれた。出戻りのルーシーは、自分に自信が持てず外出さえも一人で決められないほどに引きこもってしまう。夫に外出を許されない人妻ラファエラは、ダンスホールでの新たなロマンスを夢見つづけ、マリンは出会いを待ちつづける…。マンゴー通りはますます「窓辺の女」を生み出す。「女」を武器にするのが限定つきの解放でしかないのは、ジェンダーもセクシュアリティも美の規範も、武器にする当の「女」という観念集合がすでに中立ではないからだ。男社会のバイアスがかかった文化的カテゴリーのなかでいくら主体化しても、女性を従属させる枠組みを強化しこそすれ、それ自体からの脱出を願う主人公の答えにはならない。主人公も「女」として可視化することの両義的な意味合いを理解してゆく。

むろん、恋愛や美しさを社会から締め出せはしないし、その必要もない。問題は、美しさや恋愛によって承認されなければ自分に価値がないという思い込み、そのイデオロギー性である。拒食症や過食症に苦しむのがなぜ女性に多いのか。なぜ「愛しすぎ」恋愛に依存するのは女性なのか。つねに選別される側にみずから追いこむ他者の声と自己の声の共犯的な呼びかけがあるのではないか。ふたつの声に対する過剰適応が、暴力や破壊を自分自身に差し向ける原因ではないのか。本来は千差万別で多層的なはずの自己実現の契機を、美しさや恋愛や結婚のみに限定し、ほかの可能性をみずから摘み取る虚偽意識を植えつけるとしたら、美しさや恋愛は百害あって一利なし、悪しきイデオロギーといわざるをえない。その支配下にあるからこそ、この街が自分の居場所ではないのだと主人公も考え始める。女性のアイデンティティを民族・階級・ジェンダーのみならず、娘・恋人・妻・被扶養者などの単一のカテゴリーに固定し、二重三重に従属させる。他者規定と自己規定の命ずる「何者か」とひきかえに、固有の姿を見失っ

た女性たちは、わたしたちのなかにも少なくない。

ふたつの声が拮抗しつつ相補的に人々をスラム街に閉じ込めるのをみてきた。このようなパーソナルなレベルにとどまらず、主流派と各エスニック・グループの関係という集団のレベルでも、同じように対抗しつつ相補的にカテゴリー化を助長するふたつの声が聞こえてくる。

よく知らない人たちは、この街にびくびくしながらやってくる。わたしたちを危険だと思っている。きらりと光るナイフをかざして襲いかかってくると思ってるんだ。道に迷ってうっかりここへやってきたマヌケな人たち。(28)

偏見にみちた外部者の語りが、十把ひとからげに街の住人を「危険人物」とする表象の暴力。普遍を装い同化を迫っては排除する第一の声である。主人公はそれを「マヌケ」として一蹴し、名前や身元を明かす個別化の語りによって、貼られたレッテルを相殺する。だがそれも「褐色のわたしたち」という自己カテゴリー化にすりかわったとたん、マヌケと呼んだ当の表象の暴力を、彼女自身も肌の色の異なる地域に差し向けてしまう。

どこを見てもみんな肌の色は褐色で、わたしたちは安全。でも車で、ちがった肌の色をした界限へ行くと、ほら、やっぱりわたしたちだって、膝はぶるぶる震え、車の窓もしっかりと閉めたまま、目はまっすぐ前に向けて通りすぎる。そう。そうやって何もかわらぬまま、時ばかりがすぎてゆく。(28)

他者からのカテゴリー化に対抗して「わたしたち」という自己カテゴリー化の声をあげることで、皮肉にも「あの人たち」というまたあらたにカテゴリー化された劣等集団を立ち上げてしまう。普遍を装う中心の声に対抗する周縁の声が、みずからレッテル貼りの中心となってさらなる周縁部に弱者を生み出しては、階層的二項対立の権力構造を模倣し強めてゆく。

るつば論など主流の同化主義イデオロギーに対抗し「サラダボウル」の名で80年代以降定着した多文化主義は、文化的差異への権利をマイノリティが打ち出し、エスニック・アイデンティティの強化に貢献した。多様性は社会の分裂を招くという保守反動の声も聞こえるなか、社会の実情と肯定的に向き合い、教育やアカデミズムを民主化してきた点で、このような自己定義・自己決定の声が果たした功績ははかりしれない。

しかしふたつの声を中心と周縁で自陣のアイデンティティを主張し合うなかで、さらに声を奪われる人々が生み出されるのも見逃せない事実だ。スラム街に閉じ込められたアンダークラス、とりわけ女性や子どもである。それは、帝国主義的な植民地支配と国民国家を標榜するナショナリズムの対立によって声をかき消され、「より下位」の位置に女性や先住民が従属させられるのと似ている。エスニックな差異をレッテルのように固定して序列化するナショナリズムは、たとえばチカーノの場合「男らしさ」による女性支配を文化の名のもとにますます正当化する。またナショナルな語りは、他のエスニシティに対しても連帯や共存ではなく、自民族中

心主義的な排他の感情を助長しがちだ。集団というマクロのレベルでも、他者によるカテゴリー化と自己カテゴリー化のふたつの声は対立しながら、どちらも語りへの同化を強要する点でやはり共犯的に集団内外の小さな声を消し去る暴力を秘める。男のエギゾティックな欲望が映し出した“Spanish girl”という虚像のもとに、個別の自分を抹消される暴力にあったはずの主人公だが、ここでは彼女も異なる肌の人々に対して根拠のない偏見を抱いてしまう。それが同じ表象の暴力に自分も加担することでしかないのに思ったり、「そう。そうやって何もかわらぬまま、時ばかりがすぎてゆく」と自分の愚かさを嘆かずにはいられない。エスニシティや階級によってモザイク状に住み分けては、無関心と不信感をたがいに募らせる現状が続く限り、白人と黒人のみならず、マイノリティ同士のヘイト・クライムはなくなるだろう。

ここまでの考察をまとめよう。物語を読むなかでふたつの声に注目した。ひとつは弱さや劣性を押しつける他者の声であり、白人主流からスラム街へ、さらに男から女へ「おまえ(たち)はこうでなければ認められない」と他者の規定するカテゴリーへ同化を強要し承認を与える。もうひとつの声は、そんな強者の語りに対抗して弱者の側からあがる。「わたし(たち)はこうだ、それを認めよ」と自己の規定するカテゴリーに同一化し他者に承認を強いる。個人と集団両方の次元で、これらふたつの声の闘争し合う様子が読み取れた。

こうしてみると、この物語が他人事で片づけられないテーマをあつかっていることがよりはっきりする。いじめやセクハラなど、わたしたちの身近な問題から世界でいまなお絶えない民族紛争や原理主義にいたるまで、これらふたつの声の対立と交渉がじつは大きな要因となっている。なぜなら人が「何者か」として社会で認知されるのは、まさにこのようなふたつの声の交渉によるものだし、そもそも「主体」とは各人の意志で「何者か」としてふるまうことだと通常理解される。また、人にアイデンティティを付与する国籍・人種民族や階級やジェンダーなどのカテゴリーも、他者規定と自己規定の交わる接点で語られる自己認知の物語と、ひとまずは説明されるだろう。他者の語りと自己の語りが交差するところで、人は「何者か」になる。

しかし街の住人、とくに女たちにとってこれらふたつの語りは個別の声と居場所を奪う共犯的な暴力でしかない。主体やアイデンティティをめぐる表象の政治学は、必ずや「より下位」の位置を第三項として生み出し、対抗的な声さえもあげられないあらたな「何者か」をそこに固定せずにはおかない。帝国主義 vs ナショナリズムにおける先住民やマイノリティの位置、グローバリゼーション vs 原理主義や同化主義 vs 多文化主義における女性や子どもの位置、男／女の力関係が押し黙らせる同性愛者、夫婦間の力関係において忘却されがちな子ども…。ふたつの語りもたらす「何者か」という主体意識が、皮肉にも「本当のわたし」を裏切るという自己疎外。シスネロスはあきらかにこの位置に主人公を立たせている。ここから「自分らしくいられる場所」を取り戻すのが主人公の問いなのだ。だから「何者か」ではなくその裏側に彼女は目を向けなければならない。アイデンティティという自己認識の物語によって消し去られた痕跡にこそ、彼女の問いを解くカギは隠されている。それをあとづけるために、これからわたしたちはこの作品を執筆するきっかけとなったある出来事を追って少し回り道をしなければならぬ。答えを見出すまでの道筋は、作者本人の経験が雛型となっている。

5. バシュラール体験

1976年の秋22歳で地元シカゴの大学を出たシスネロスは、アイオワ大学院の創作科へ入学。ここは当時から詩や小説で成功をめざす若手文学者の登竜門であり、中流以上の多くの白人エリート子弟にまじって、全国でもっともハイレベルの文章修行にしのぎをけずっていた。

ある授業でフランスの哲学者バシュラールの『空間の詩学』がとりあげられ、「記憶の元型」をめぐる活発な議論に彼女はショックを受ける。屋根裏部屋や地下室など幼少期の隠れ場所が、のちに詩人たちの精神の内奥部にひそむ靈感の源泉として特権的な場所になるというバシュラールの指摘に刺激されて、学生が自分の育った家のなつかしい隠れ場所を次々と披露しだす。動揺した彼女は恥ずかしさのあまり何も言えない。引越しを重ねスラム街を渡り歩いた彼女には、ぬくぬくと籠れる場所など無縁なばかりか、ねずみが出没し泥酔者の投げた石で窓ガラスが割れる音に脅かされる暮らしは、一刻も早く逃げ出したい牢獄でしかなかった。「クラスメイトはアメリカでもっとも優秀な大学出身であり温室で手厚く育てられた美しい花。一方わたしは、ひび割れたアスファルトに咲く黄色い雑草の花。」ちがいは絶望的なほどに大きかった。

ここにいることの場違いさ、乗り越えがたい異質性に直面した彼女は、あらためてこれまでを振り返る。二級市民の地位に自分たちを閉じ込める白人主流の同化主義に対抗して、自分は文学で身を立てるためにここまで来た。白人男性の詩人教授やエリート学生のなかで認められるのが何よりも大事と信じて疑わずに。そう、ふたつの声を内面化していたのは誰よりもまず彼女自身だったのだ。他者によるカテゴリー化と文学による立身出世という自己カテゴリー化である。ふたつの声がまさに相補的に「承認される／されない」という受身の位置に自分を固定し、いまこの事件によって自分は文壇から結局は拒絶される、と思ったことだろう。

だが追いつめられた彼女はここではじめて発想を切り替えた。同化をさまたげるこの違い、つまり「貧困街で育った経験こそ、ほかの誰にも書けないテーマとなりうるのではないか。極貧のチカーナの少女。そう、これなら誰にも書けないわたしの独壇場だ。」欠点や恥としてきたものこそ長所や個性のカギを握る。人との違いにこそ自分本来の居場所がある。創作科の激しい競争のなか、周囲にまぎれこむことで保身をはかり孤独をまぎらわしてきた彼女は、このとき自分の異質性と向き合うことによってはじめて独自の声を手に入れようとしていた。貧しく傷つきやすい少女の声は、他者規定と自己規定のふたつの声に同化するなかで作者が長く否認し抑圧していた自身の無意識、内なる〈他者〉から汲み取られた声だったのだ。「バシュラール体験」は大きな転機だった。彼女はようやく白人男性中心の文学的規範の呪縛を脱し、マイノリティ女性作家として第一歩を踏み出す。それがこの作品を執筆するきっかけだった。

こうしてシスネロスは少女の自分と再会する。アイオワの彼女とちがいはけっして一人ではなく、スラム街の人々にいつもにぎやかに取り囲まれていた。内面化した主流の視線では、固有名をもたず無知であわれな貧乏人という抽象的な群れでしかなかったのが、いまは一人一人固有の声で呼びかけてくる。それは、たがいに懐深く受容し合う女たちの親密な共同体

だった。母親のベッドにもぐり込んだときのぬくもりと髪の毛の香り、ちょっと微臭い親友たち、そしてスクラムのように枝を絡ませ逆境を励まし合って伸びる四本の楡の街路樹…。のちに主人公が語る物語は、「何者」でもないが自分は大事という無条件の自己肯定感を少女期のシスネロスのなかにしっかりと育んでいたのを示す証左といえる。人の価値は「何者か」によって決まるのではない。世界にたった一人しか存在せず各人が固有名であることそれ自体が、掛け値なしの価値のはずだ。そう教えたのはあの街の女たちなのに、当人たちはそれを奪われたままでいる。主体化を妻や母や恋人に限定したがために結局は強者の語りに同化され、他者から分離した対等なく他者性>、<個>への敬意までも奪われた。ありのままの「わたし」を育んでくれた彼女たちが、ありのままでいられない。

これらの人々は「彼女たち」なのか、それとも「わたしたち」なのか。シスネロスは自問する。もしエリート大学院に身をおく現在の立場からすれば、やはり「彼女たち」であり多少なじみはあるがしょせん他人事、他者を自分の語りに回収する表象の暴力をくりかえすしかない。ましてそのような借用を隠し、脱出を果たした者が脱出できなかった人々を「ほかの誰にも書けない独壇場」とすることなどできはしない。では、もし「わたしたち」とするならば、「彼女たち」の一員でありつつ同時に作者の分身でもあるような媒介的な語り手が不可欠だ。見おろして語るのではなく、同じ目線で「窓辺の女」になる現場を目撃しながら外部に証言することで作者と彼女たちをつなぐ、そんな架け橋としての語り手。そう、それがエスペランザである。貧困のなかで思春期を生き、詩や物語が大好きな反面、女たちと同じ劣等感や弱小感の傷をもつ少女の語りは、このような要求によって生み出されたのだ。

彼女たちとシスネロスの境界に立ち両者を行き来しながら、「あそこ」での出来事をアメリカや世界中の「いま、ここ」で起きていることへリンクさせる<翻訳者>。そういった任務に当の主人公がめざめるきっかけは、不思議な三人の老姉妹との出会いだった(この一節はアイオワでの「改心」の直後に詩としてはじめ書かれた)。友人の夭折した妹の葬式で、故人の名付け親を名のる姉妹に出会う。言われるままに名前を告げ、手相を見せ、心のなかで願い事をした主人公を彼女たちはこんなふうにいましめる。

出ていくときはね、あんたはほかの人々のために帰ってくることを忘れちゃダメなんだよ。円環^{サークル}ってわかるだろう？ あんたはこれからもいつだってエスペランザなんだからね。いつだってあんたはマンゴー通りなの。あんたの知ってることを打ち消せはしないんだよ。自分がどんな人間かってことを忘れたりはやせないのさ。(105)

自分だけの脱出を願う心を見透かされて動揺する主人公は、やがて気づく。これまでわたしは自分に自信がないのを街のせいにして逃げ出そうとしてきた。だが、もし脱出がかなうとしたら、それは家族や友人やこうして死んでいった幼い命をはじめとする人々と出会い、何者でもない自分が受け入れられ、多くのことを学んだおかげではないのか。なかでも女性たちとの出会いがあったればこそ、異なる脱出法を自分はめざせる。同化イデオロギーの刷り込んだ主流

の視線が羞恥心をかきたてるあまり、自分を育てたこの街をも否定しようとしてきたのではないか。エスペランザ。英語で「希望」を意味する名前は、背後に「かなしみ」や「待つこと」というスペイン語の意味の層を深く折りたたんでいた。そこには曾祖母をはじめとし貧困と差別に閉ざされて生を終えた無数の名もなきチカーナの声が、いまなお聴き取られないままにつぶやきを発している。そのつぶやきこそ「希望」の由来ではなかったのか。ならばそれに耳をふさいだままの脱出というたんなる自己実現でなく、これら負の由来によって支えられる希望として脱出したい。すなわち女たちの聴き取られなかったつぶやきに耳をかたむけ、彼女たちの「ありえたかもしれない過去」の声、「窓辺の女」へと主体化する過程で抹消された一人一人の〈個〉の声をすくいにとって外部へ語り出すこと。いわば〈声の越境〉の触媒、これこそエスペランザという名にふさわしい本当の脱出ではないのか。

閉ざされた声の運び屋になりたいならば、主人公は脱出後も声を求めてくりかえし戻って来なければならない。このことの伏線として作者は主人公におもしろい話を語らせていた。首尾よく脱出して夢の家を実現すると、多くはむかしを忘れ去り残された人々など顧みなくなるが、主人公は自分が何者でどこから来たのか忘れたくない。居場所のない辛さが身にしみてわかるから、もし浮浪者に一夜の宿を乞われたら、客間はともかく屋根裏部屋に泊まってもらうと言う。ここでの浮浪者とは昔の自分自身であり、スラム街に残された人々を意味する。また作者にすれば、浮浪者はみずから否認し抑圧してきた恥多き少女時代であり、居場所のなさに苦しんだ当初の主人公本人でもある。主人公にしる作者にしる文学者のアイデンティティは、他者を自己の語りに同化しつつも、なおかつ語りえない〈沈黙＝他者性〉をたえず内部に持ち続けることによってはじめて維持・更新される。「わたし」として認識されたカテゴリー内につねに脱自己カテゴリー化の契機を含み持つことで、アイデンティティの多層化・流動化をうながし、狭量なナショナリズムに固定するのをふせぐ。のちにシスネロスは言う、「彼女たちの一員でなくなったら、その物語を語る権利がどうしてわたしたちにあるというのでしょうか?」。内部にホームレスを宿すことによって成り立つ自分らしい居場所、一見たわいない少女の空想は、声なき同朋に依拠するマイノリティ女性作家の負債と責任の自覚をすでに宿していた。

6. 「わたし」という〈傷つきやすさ〉

だが声の越境をめざす語りも、気をつけないと主体化を迫るふたつの声に逆戻りしてしまう。身をもってそれを教えたのは、不治の病におかされたルーベおばさんだ。自作の詩を枕間で読むと「書くことを忘れなければ、おまえは自由になれるよ」と励ましてくれた全身麻痺のおばさんを、ある日魔がさした主人公は物笑いのタネとしてしまう。文学へ後押ししてくれたおばさんは、当の「語り」によって貶められることで重い教訓を彼女に残して死ぬ。自分の語りに他者を同化させることは、語りに回収されない他者の〈他者性〉を貶める暴力でしかない。その危険を避けるために求められるのは、どんな語りなのか。それは、弱点だった彼女の資質がフルに発揮されてはじめて可能となる語りだった。

人間関係は通常仕事でも家庭でも、意外と役割や肩書きにもとづくことが多い。裏返せば固有名だけの＜地＞は、「何者か」という＜図柄＞（社会的カテゴリー）に刻み込まれなければ、あまりに傷つきやすくもろいから体面で自分を守るのだろう。しかしそれも子どもにはあまり意味がない。とくにジェンダーが男の子に強いる虚勢から自由な分、女の子はなおさらだろう。主人公もまた素の自分が恥や劣等感で傷ついた分、体面にかろうじて守られた素顔のもろさや傷つきやすさに人一倍敏感に反応する。たとえば、メキシコにおいてきた祖父の死を父親が告げるとき、彼は意外な表情を娘に見せる。

おまえのおじいちゃんが死んだ、ある朝早くわたしの部屋にきてパパがいう。エスタ・ムエルト——死んでしまったといって、まるでその知らせを聞いたばかりのように、コートみたいに身をまるめて泣く。勇敢なわたしのパパが泣いている。いままでパパが泣くところなんて見たことがなかったので、どうしたらいいかわからない。(56)

「家族」という語りのなかで自明とされてきた父親の体面が、死という非日常の介入によって、もろくも崩れ去るのをいま目撃する。肩を震わせて泣く姿は、「何者」でもなく無防備にさらされた彼の＜他者性＞がいかに傷つきやすいかを暗示している。

わたしのパパ。ずんぐりした手に分厚い靴、暗いうちに疲れのとれないからだを起こして、水で濡らした髪をとかして、コーヒーを飲んで、わたしたちが起きるまえに出かけてゆくパパが、きょうはわたしのベッドに座りこんでいる。

もしも、わたしのパパまでが死んだらどうしよう。わたしは自分の腕にパパを抱きしめる。しっかりとパパを抱きしめて、抱きしめて、抱きしめる。(57)

このとき彼女もまた「娘」や「子ども」といった体面をかなぐり捨て、同じただの人として彼に駆け寄っている。父親という＜図柄＞を刻まれることで暮らしを支えてきた＜地＞の部分が、じつはいかに壊れやすいか。死によって喚起され、むきだしになった個体のいのち本来の脆弱さを彼女は全身で受けとめていつくしむ。主体意識やアイデンティティではなく、それが隠す傷口の痛み^{ボジョネガ}に感応する彼女の姿勢が、語りに比類ない魅力を与える。

写真の陽画と陰画のように、人は「何者か」になる代償として固有性・単独性を失う。生きるとは、この唯一無二の＜いのち＞^{いた}を傷め刻一刻と燃やし尽くす暴力に耐えぬくことにほかならず、「何者か」にではなく、この点にこそ個人の掛け値なしの尊厳は宿る。主人公の語りは、いのちの＜傷つきやすさ＞^{ヴァルネラビリティ}に対する極限的な感受性を読者に呼び覚ます点において、他者規定や自己規定といった主体化の語りとは異なる。＜傷つきやすさ(可傷性・被傷性)＞^{ヴァルネラビリティ}、哲学者レヴィナスに由来するこの言葉を、鷺田清一はこう説明する。

他者の苦痛に対する苦痛、他者の悲惨とその切迫を感じないでいることができないという

こと、このことがレヴィナスのいう〈傷つきやすさ〉の意味である。なるほどわたしは後になって他者のこの傷から目を背けること、見て見ぬふりをすることもあるかもしれないが、そういう選択以前に、わたしはその傷にふれ、その傷に感応している。そういう選択以前の応答(réponse)、そういう他者の苦しみに苦しむわたしの〈傷つきやすさ〉のなかに、〈責任〉(responsabilité)というものの根があるというわけだ。

主体化を迫る表象の暴力が沈黙のなかに閉ざす^{ツァルネラビリティ}少女たちの思い、個別の〈他者性〉をかき消されたときの〈痛み〉が、少女の〈傷つきやすさ〉との共振を通じて読者へ送り届けられる。

弱点だった傷つきやすく繊細な感受性こそがめざす語りには不可欠であり、ひいては自分らしい居場所を開くカギともなるのは、まず彼女がすぐれた聞き手であったことからわかる。スラム街の奥深くに分け入る小型で高感度の集音器。子どもの目線で世界をとらえ、少女を取り囲むものに耳をすます。路地裏や空き地、台所や洗面所やコインランドリー……。すると主体や帰属意識から解き放たれたときに人々の発する個別のつぶやきが、縄跳びの唄や井戸端会議や深夜の祈りのなかから漏れ聞こえてくる。聴き取られ語られることもないままに社会の底辺をさまよう無言の思いの数々に、彼女は懸命に耳をそばだてて応答する。貧困街を一望のもとに見下ろし分析する知識人の視点も、貧しさとの距離を前提にする中流階級の視点もなしえないような高感度の聴き取りと細部にわたる注視が、少女の話し言葉で伝えられる。大人びた解釈や批評のかわりに、文学好きの少女らしいレトリックがときおり色を添える。おかげで読者は作者の存在を忘れてしまうほどに、少女の視線と同一化する。有色の女性が生きる世界の^{てざわ}手触りが、壁の隅々から内在的に再現されて生き生きと伝わってくる。せりふに引用符をつけず、彼女の地の語りとあえて混在させるのも、主体化を逃れた女性や子どものみずみずしい話し言葉の氾濫に、たっぷりと読者を浸らせるためだろう。

こうした聴取と語りは、自身が受けた恥や傷を人々の思いのかたわらに差し出して共振させるなかから生まれる。ダンス・パーティーでみすばらしい靴を恥じるあまり自分の足がますます肥大する錯覚に苦しむ彼女だから、バルガスの子どもが飛ぶ練習だといって転落死したとき、とめずに放置した大人の態度にこの街のいのちの軽さを感じずにはいられない。肉がないのでライスをはさんだサンドイッチを人前で食べるはめにおちいった苦い経験をもつ彼女だから、育児に追われ夫の暴力に脅かされるミネルヴァが紙切れにしたためてポケットに忍ばせる詩に込めた思いがわかる。セクハラやレイプなどおぞましい記憶に苦しむ彼女だから、サリーが結婚によって父親の支配を逃れ夫の支配におもむくときに言った「彼を愛してるの」という一言がもつ複雑な思いもわかる。ひき逃げで殺された不法労働者が当局の語りによって犯罪の容疑者にされたり、直前に出会ったマリンの証言で「よくいる手合いの出稼ぎ者」として身元不明のままゴミのように処理されるのに抵抗し、祖国で仕送りを待つ家族の、決して記録にしろされない思いを聴き取ろうとするのも、傷つきやすい彼女ならではといえる。貧困のレッテルをはられ、男の権力欲と性愛の欲望に服従する主体へと引きずり込まれるときに、どのような表象の傷を「わたし」という壊れやすい存在が受けるのか、語り手は自身の痛みにおいて語る。彼女の

差し出す＜傷つきやすさ＞^{ヴァルネラビリティ}にうながされて、閉ざされた沈黙が氷解してゆく。

劣等感や弱小感は強者への同化がもたらした虚像であり、＜傷つきやすさ＞^{ヴァルネラビリティ}との共振と増幅があったればこそ、声なき声が聴き取られ語られる。貧しさや見栄えの悪さに傷つくナイーブな繊細さこそ、弱点どころか彼女らしい語りの生みの親だった。自分の異質性のなかに独自の文学を開くカギを見出した作者自身の転機が雛型^{ひながた}となり、本人も気づかないうちに、主人公は自分にしか聴き取れないものを、自分にしかできない語りに翻訳することで、もっとも自分らしさが発揮される領域を切り開いていた。否認してきた異質性を怖れさえしなければ、それはもっとも自分らしい宝物に変わる。自分さがしの旅がたどり着いた地点は、最後からふたつめの章でこんなふうに語られる。

ただ、雪のように静かでまっしろな家。そこへ行けばわたし自身になれる空間、詩が書かれるまえのまっさらな紙のように。(108)

「まっさらな紙」に主人公のつづった詩が、ほかならぬこの物語だったのをここでようやく読者も悟る。閉じ込めてきた街は語られることで少しずつ過去へしりぞき脱出が果たされる。振り返ったマンゴー通りは、もはや牢獄ではなく思い出のなかにおさまるくらい小さい。やがてふたたび主人公はペンをとり、あの街へくり返し帰ってゆくだろう、語りつくせない未生^{みしょう}の声を追って、肩を寄せ合って生きた女たちの記憶が眠るほろ苦い思春期の街へ。マンゴー通りを物語る行為それ自体のなかに、もっとも自分らしくいられる場所を彼女はいつしか築いていた。占い女エレニータの「おまえの居場所は心のなかにある家、心でできた家だよ」という予言を、いつのまにか彼女は成就していた。

先述の鷺田によれば、アイデンティティは一人では見つからず、どの他者と向き合うかが重要になる。そして他者の語りに同化されないことで、その人から見て意味ある他者たろうとする、それを自分に語って聞かせる自己認識の物語がアイデンティティだと言う。長く主流と向き合ううちに作者も主人公も強者の語りに同化され、語りに還元されないみずからの＜他者性＞を見失っていた。つまり語りに同化されず「他者から見て意味ある他者」たろうとする対等なく個＞の自由と尊厳を、そうやってふたりは放棄していたわけだ。アイオワでの出来事をきっかけに作者は向き合うべき他者が白人ではなく、自分を育てたスラム街の人々、とくに女たちだと悟る。「窓辺の女」へと主体化を迫るふたつの声の暴力をあばき、それによって抹消された個別の＜他者性＞を救い出すあたらしい語りこそ、独自の文学を開くカギとなる。そこで、かき消されたつぶやきを聴き届ける声の媒介者に少女を選び、忘却されてきたみずからの思春期へと派遣する。そして主人公自身も声なき声の聴取と越境を使命とするあらたな語りの創出を志すところで物語は終わる。それが女たちを支配した主体化の語りに自分は同化されず、彼女たちから見て「意味ある他者」たろうとする主人公の自己認識であり、「自分らしくいられる場所」という問いによりやく見出した答え、彼女のアイデンティティなのだ。

到達点を暗示するとびっきりの伏線が、「エスペランザ」という名前だ。はじめはこの名が嫌

いだった。英語名らしくないと級友にはやされるし、この名が曾祖母から受け継いだ「かなしみ」や「待つこと」というスペイン語の意味もクラい。そんな名前もろともに彼女をありのまま受け入れ育んだのが、この街だった。だが他方で女たちがありのままでいられなくなるのを、彼女は目撃してきた。「かなしみ」や「待つこと」がむかしだけでなく、いまなお自分たちを支配しているのに気づいたとき、はじめて彼女は三人姉妹の「あんたはこれからもいつだってエスペランザ(希望)なんだからね」という警告の真意をつかんだにちがいない。「窓辺の女」たちによって支えられながらもその語りには同化されず、それを〈地〉としてあらたな「希望」の〈図柄〉を刻み物語ってゆくこと、それがこの名にふさわしい「本当のわたし」なのだ、と。こうして自分が誰から見て意味ある「希望」たりえるのかを認識する過程が、彼女の自分さがしとなる。この名が隠し持つ歴史と願いを十全に引き受けたとき、彼女は本当の「エスペランザ」になる。

女たちの過去の思い残しを、少女たちが未来において果たす希望へと語り継ぐ〈翻訳者〉。本の冒頭につけられた「女たちへ」という献辞は、奪われた過去の声にこの物語が依拠するのを示すオマージュであると同時に、この本を手にする名もなき少女たちが過去のついでた希望を未来の実現に向けて引き継いでほしいという願いも込められているにちがいない。

声なき者たちの共同体意識によって裏打ちされ、なおかつ「ありえたかもしれない別の語り」を個人のアイデンティティとして接ぎ木する。マイノリティ女性文学は、個の確立を共同体との相克や対立でとらえてきた西欧の近代文学にかわるオルタナティブな可能性に満ちている。

エスペランザを待ち続けるわたしたちのなかのマンゴー通り(むすびにかえて)

主人公の自分さがしは、作者が自分自身と再会しマイノリティ女性作家としてカミングアウトするまでの経緯だった。一方学生たちはこの物語から何を受け取れるだろう。彼女たちそれぞれの自分さがしとリンクできるような「小さな普遍」を以下まとめよう。

「わたし」とは誰か。それぞれに固有名である、という言い方しかこの問いには答えられない。反復・再現可能な言語では、この一回限りで固有の出来事は語り尽くせないからだ。「何者か」というカテゴリーに、本当のわたしはすでにいない。「わたし」を語る幾重もの言葉の網の目からこぼれおちる余剰こそが、自己という唯一無二の個別性・単独性を支える。固有名とはそういう意味だし、個人が掛け値なしに大事なものは、異質で語りえない〈他者性〉を持つ、世界に一人しかいない存在だからだ。いわば究極の少数派、だから〈個〉は平等に尊い。

異質性こそが〈個〉の価値の源泉なのに、とするとわたしたちは違いを怖れてしまう。なぜなら国家や社会や文化は、わたしたちを意味ある「何者か」にカテゴライズするために、異質を嫌うように仕向けてきたからだ。だから他者規定と自己規定のふたつの声にからめとられ、意味ある「何者か」としての主体や帰属意識を与えられ、その語りのなかに個別の違いを回収するよう教育される。しかし違いは語りに還元しきれないために、無意味とされるか「何者か」にふさわしくない負の意味を持たされて、矯正すべき欠点や短所か、内部の〈非自己〉として否

認められ無意識へ抑圧される。異質な他人が不気味で怖いのは、わたしたちの内部で傷つき損なわれた個別の違いが疼き出し、そのおぞましが外部に投影されたからにほかならない。

差別の元凶、個別の差異を十把ひとからげにレッテル化し優劣へと序列化する表象の暴力は、ここで生起する。抑圧された異質性が「わたし＝何者か」という自己の輪郭を内側から脅かすとき、自我は主体や帰属意識の過剰防衛に走り、内部の異質/非自己が投影された外部の他者をおぞましいスケープゴート「あの人(たち)」として周縁に駆逐し、それを踏み台にして「わたし(たち)」(中心)の優位性を強化する。アイデンティティをめぐるこのような表象の力関係は、^{ポリティクス}同化主義と多文化主義がせめぎあうアメリカはもとより、いじめから民族紛争にいたるまで、人を「こちら側」と「あちら側」に分断し優劣をつけあっては、さらに沈黙を強いられた弱者をいまなお生み出し続ける。わたしたちもまた「何者か」に自他を固定する語りを日々くりかえすことで、内外の異質の声をかき消す暴力に加担する。それぞれの語りえない<他者性>に無数の抹消線を引くことで、<個>の自由と尊厳の源、一人一人が究極の少数派である事実から目をそむけようとする。

マンゴー通りはこうして誕生する。それは、保身とちっぽけな品位を保つ「何者か」にそぐわないとされた個々人本来の異質性が、排斥すべきおぞましい異分子として貶められ幽閉された、わたしたちの一人一人の内なる「ゲッター」である。「かなしみ」や「待つこと」に暮れる女たちは、狭量なアイデンティティにしがみつくわたしたちが忘却した自分らしさの陰画だったのである。白人が自分の優秀さを確認するために周縁部に投影する余剰の部分、男が権力を維持するために否認しなければならない内なる脆弱さ、そしてわたしたちが「先進国」の一員となるために目をつぶる日本社会の負の部分…表象が「何者か」の<図柄>を刻むたびに傷つき見えなくされる<地>の部分、それがマンゴー通りなのだ。

「小さな普遍」を見出せば、マンゴー通りへくり返し帰ってゆくエスペランザの物語は、わたしたち自身の物語にもなる。「あの街」ではなく「この街」として、自分さがしに行き暮れたときにそれぞれが帰ってゆくほろ苦くもなつかしい街としてとらえなおす読み方は、民族・階級・ジェンダーをめぐる幾重にも差別されたマイノリティ女性の特殊性と相反するどころか、むしろ多文化社会アメリカに関する理解と共感を深めてくれるだろう。

強さを求める白いフェミニズムに代わる、弱さを怖れない有色のフェミニズム、この物語をいち早く日本に紹介した一人、翻訳家の菅啓次郎は、シスネロスの姿勢をこう呼んだ。住人たちの語りえない<他者性>を抹消し従属的位置へ主体化する表象の暴力と痛みを、みずからの<傷つきやすさ>による分有の語りを通じて、読者に送り届けようとするエスペランザ。わたしたち一人一人の弱さと怖れずに向き合い、そこに隠された<個>という宝物をあらたな連帯と抵抗のための希望へとつなぐ勇気ある聴き語り。いま、わたしたちは本当にエスペランザを必要としている。

テキスト(引用は下記の翻訳を参照し、適宜改筆。その後にページ数を記した。)

Cisneros, Sandra. *The House on Mango Street*. New York: Random House, 1984.

----- *The House on Mango Street* (2 cassettes). New York: Random House, 1998.

S. シスネロス著、くぼたのぞみ訳『マンゴー通り、ときどきさよなら』東京、晶文社、1996。

主要参考文献

Miriam-Goldberg, Caryn. *Sandra Cisneros: Latina Writer and Activist*. Berkeley Heights: Enslow Publishers, 1998.

Olivares, Julián. "Sandra Cisneros' 'The House on Mango Street' and the Poetics of Space." *Chicana Creativity and Criticism*. Eds. María Herrera-Sobek and Helena María Viramontes. Albuquerque: U of New Mexico, 1996.

Quintana, Alvina E. *Home Girls: Chicana Literary Voices*. Philadelphia: Temple UP, 1996.

L. アルチュセール著、柳内隆訳『アルチュセールのイデオロギー論』東京、三交社、1993年。

今福龍太「世界文学の旅程」『越境する世界文学』東京、河出書房新社、1992年、2-11頁。

今村仁司 栗原仁共著『フーコー』東京、清水書院、1999年。

上野千鶴子『発情装置』東京、筑摩書房、1998年。

岡真理『記憶／物語』東京、岩波書店、2000年。

栗原彬「表象の政治」(インタビュー)『思想』907(2000年)、5-17頁。

E.W. サイド著、板垣・杉田監修、今沢紀子訳『オリエンタリズム』東京、平凡社、1993年。

菅啓次郎『狼が連れだって走る月』東京、筑摩書房、1994年。

ガヤトリ.C.スピヴァク著、上村忠男訳『サバルタンは語ることができるか』東京、みすず書房、1998年。

高橋哲哉『デリダ』東京、講談社、1998年。

竹村和子「アイデンティティの倫理」『思想』913(2000年)、23-58頁。

港道隆『レヴィナス』東京、講談社、1997年。

鷺田清一『「聴く」ことの力』東京、TBSブリタニカ、1999年。

鷺田清一『自分・この不思議な存在』東京、講談社、1996年。

